【用語】貴翰―相手からの手紙　公方様―幕府の将軍　恐悦―謹んでよろこぶこと　首尾―結果　御暇―江戸への参勤を終え帰国すること　珍重―めでたいこと　後音―あとの便り　恐惶謹言―手紙の終りに記す挨拶文、恐れかしこみ、つつしんで申し上げるの意　貴報―相手を敬って、その音信または返書をいう語

【解説】伊勢崎藩は、慶長六年（一六〇一）稲垣長茂が一万石で入封したのが始まりである。しかし、元和三年（一六一七）には前橋藩酒井氏の所領となり、寛永十四年（一六三七）に改めて酒井忠能（ただよし）が二万二五〇〇石で立藩した（第一次）。その後、寛文二年（一六六二）に再び前橋藩領となり、天和元年（一六八一）前橋藩主酒井忠清の次男忠寛（ただひろ）が二万石を分与されてからは酒井家の藩政が明治維新までつづいた。この第二次酒井氏時代の初代忠寛は、江戸城の門番や大坂加番などを歴任したほか、元禄十一年（一六九八）には新田大光院の修復に際し普請奉行を命じられている。

この文書は、酒井忠寛が備後国福山藩主（広島県福山市）の水野勝種へあてた返書である。年次不詳であるが、水野勝種が参勤を終えて福山へ帰城したという知らせに対する祝い状と思われる。このような往復の書状が取り交わされたのは、おそらく忠寛が江戸城の門番を務めていたことによるものであろう。なお、水野氏は毎年七月朔日に御暇を願い出て、八月中に帰国したが、この返書では勝種が帰国する際、将軍家から馬を拝領したことを記している。